

九州地方における産業遺産を訪ねて

——世界産業遺産候補の予備調査 (2)——

庄 谷 邦 幸*
種 田 明**
並 川 宏 彦***

〔Ⅰ〕 日本における「近代化遺産」調査

最近20年間に日本の「近代化遺産」調査が産業考古学会会員や、日本機械学会、日本土木学会等の諸学会、経済団体等によって進められ、そのデータベースが構築され、市民、研究者や関連学会の共有財産になりつつある。

一方、文化庁も地方自治体の教育委員会の協力を得て、1990年度より群馬県、秋田県から調査を開始し、毎年数県の近代化遺産が調査され、その成果が逐次刊行されつつある。

またユネスコの世界遺産保護条約委員会による世界文化遺産の中に産業遺産を含めて考えるようになり、国際産業遺産保存委員会 (TIC CIH) でも、その選考基準が討議されつつある。

さて、本学の産業遺産研究の共同研究プロジェクトは1995年3月に世界の産業遺産候補としての奥出雲を中心とする中国地方の「たたら」製鉄遺産群の予備的調査をおこない、その結果を報告したが (『総合研究所紀要』第21巻第2号, 1995年12月), 今回は1996年3月上旬に鹿児島市の尚古集成館や大牟田市の三井企業集団の産業遺産を中心に、九州地域の世界産業遺産候補の予備調査をおこなった。以下はその記録である。

1996年2月29日〔鹿児島市〕尚古集成館,
旧鹿児島紡績所技師館 (異人館) などを見学・ヒアリング

*本学経済学部

**本学文学部

***本学文学部

3月1日〔熊本県水俣市〕水俣病歴史考証館, 水俣市立水俣病資料館を見学

〔福岡県大牟田市〕石炭産業科学館, 三井港倶楽部, 三池カルタ記念館を見学・ヒアリング

3月2日〔福岡県大宰府市〕大宰府宝物館, 九州歴史資料館を見学

〔佐賀県鳥栖市〕中富記念くすり博物館を見学・ヒアリング

今回の現地調査で尚古集成館の田村省三氏, 松尾千歳氏, 大牟田市石炭産業科学館の平島勇夫氏に大変お世話になった。記して謝意を表します。また薩州見取絵図の内「いそ反射炉方図 (集成館絵図)」 (本文図2) の掲載を許可され, 原版を送っていただいた財団法人鍋島報効会 (理事長鍋島直晶氏) にお礼を申し上げます。

〔Ⅱ〕 旧 集 成 館

旧集成館は鹿児島市吉野町にある。この旧集成館は第28代島津斉彬が薩摩藩の軍備充実と殖産興業を営んだ総合コンビナートである。

江戸時代も終わりに近い天保年間 (1830~1844), 鎖国政策を採り続けていた日本の近海には, 欧米の艦船がしきりに来航するようになり, 特に日本の南の玄関にあたる薩摩藩では, その危機感が強く感じられていた。弘化年間 (1844~1848) になると, 薩摩藩が支配してい

た琉球国（沖縄）へイギリス・フランス船の来航が相つぎ、通商や布教の許可を求めるようになり、薩摩藩はその対応に苦慮した。

嘉永4（1851）年、局面打開を期待されて藩主となった島津斉彬は、西欧の文明を積極的に取り入れ、殖産興業・富国強兵の政策を推進した。まず斉彬は鹿児島城内に製錬所を設け、反射炉等の実験をおこない、翌5年別邸であった磯邸内で反射炉の建設に着手し、5年の歳月をかけてこれを完成させた。これに伴って、溶鉱炉（高炉）・鑛開台（錐通台）・硝子製作所・陶磁器製造所・農具製造所・刀剣製造所・氷砂糖製造所・抄紙場・胡粉製造所・搾油機械及び工匠器機製造所・獣皮消軟所・皮革器機製造所・膠製造所などがあり、安政4（1857）年これらの施設を合わせ「集成館」と命名した。これが集成館の前身である。また磯には造船所があって、洋式帆船や蒸気船の建造もなされた。

斉彬が築いた「集成館」は、文久3年（1863）の薩英戦争でイギリス艦隊の攻撃を受け、そのほとんどが焼失した。しかし、このことは薩摩藩に近代科学の必要性を痛感させることとなり、斉彬の跡を継いだ島津忠義は直ちに「集成館」の再建に着手し、慶応元（1865）年3月、蒸気鉄工機械所（現在の尚古集成館・重要文化財）の竣工を手はじめに次々と諸工場を整備していった。

また忠義は同年、19名の使節と留学生をイギリスに密航させて西欧文明の受容を命じたが、同時に紡績機械の購入と技師の招へいを指示し、慶応3（1867）年には、7人のイギリス人技師たちのもとで、鹿児島紡績所が操業を開始した。これは日本における洋式機械紡績の先駆けであり、集成館隣接地には、当時の技師たちの宿舎であった旧鹿児島紡績所技師館（史跡・重要文化財）がのこされている。

明治4（1871）年国有となった「集成館」は幾多の変遷ののち、明治22年には再び島津家の所有となったが、大正4（1915）年に閉鎖され、同12年にはのこされていた蒸気鉄工機械所を改修して、博物館「尚古集成館」が開館した。

日本の近代化発祥の地として昭和34（1959）

年その敷地は国の史跡に指定され、「尚古集成館」の建物は、昭和37（1962）年に重要文化財の指定を受けた。

「集成館」の沿革と島津斉彬の諸事業を尚古集成館の資料（1989年）に基づいて再掲する。

（A） 集成館の沿革

- 1851(嘉永4) 斉彬藩主になる(43才)。
製錬所を設け、反射炉ひな型を建てる。紅ガラス製法を研究させる。
- 1852(嘉永5) 英艦、那覇に来航。
蒸気船建造などの伝習生を長崎におくる。
大門口砲台を築く。
- 1853(嘉永6) 米使ペリー、那覇に入る。
祇園洲砲台を築く。
- 1854(安政1) 西洋型伊呂波丸竣工。琉球大砲船を改造、「昇平丸」と名付く。
溶鉱炉竣工。
活字(和洋)を製作。
- 1856(安政3) 反射炉完成。
- 1857(安政4) 磯邸内にガス灯つく。
磯工場群を「集成館」と命名。
肥前佐賀使節、千住大之助ら来薩。
- 1858(安政5) 幕府練習艦日本丸鹿児島に来航。
斉彬没す。
- 1862(文久2) 生麦事件起こる。
- 1863(文久3) 薩英戦争起こる。集成館焼失、島津忠義、集成館再興に着手する。
- 1865(慶応1) 薩摩藩留学生19名と共に新納刑部、五代友厚をイギリスに派遣し、紡績機械の購入及び技師の招へいにあたらせる。
- 1867(慶応3) 紡績工場、操業を開始。
- 1868(明治1) 鳥羽伏見の戦い起こる。
- 1869(明治2) 集成館事業廃止。
- 1871(明治4) 集成館官有となる。
- 1877(明治10) 西南戦争起こる。製油所を開業。
- 1892(明治25) 集成館廃止。

集成所を開く。

1897(明治30) 紡績工場閉鎖。

1902(明治35) 磯島津家集成館開業。

1915(大正4) 磯島津家集成館廃止。

1923(大正12) 尚古集成館開館。

(資料出所) 尚古集成館 1989年

(B) 島津齊彬の諸事業

I 御城内動植物館内御花園(開物館) 嘉永4(1851)~安政5(1858)

——理化学の研究を目的とする——

1. 製煉所の雛型
2. 理化学及び応用化学による技術開発, 金銀属の分析
3. 硫酸・硝酸・塩酸等種々の酸類
4. 金銀メッキ(甲冑金具にも応用)
5. ガラス器製造
6. 硫酸製造室雛型(集成館に大製造室を建築の目的)
7. 陶磁器用の釉薬
8. 甘藷をもってアルコールの製造(洋酒製造のねらいもあり)
9. 硫酸烟をもって絹綿布晒白法
10. 洋式朱粉製造
11. 蒸餅製造(パンか)・玉味噌製造
12. 紅色ガラス製煉
13. 洋式搾油機械
14. 鋳銭法
15. 銀板写真
16. 電信機(御本丸~探勝園御茶屋の間)
17. 綿火薬(嘉永5年)
18. 氷白砂糖
19. 蒸気車雛型

II 磯御茶屋及び集成館

1. 水雷(安政4年磯御茶屋にて実験)
2. ガス灯(磯御茶屋・集成館内鑽開場 安政4年)
3. クリスタルガラスの製造(安政3年)
4. 反射炉(嘉永5年) 安政3年落成 同年さらに一基の増築に着手, 翌年落成大砲鋳造用
5. 大小砲鑽開台(嘉永5年)

6. 熔鋇炉(嘉永5年着手 安政元年落成)

7. 農具製造

8. 刀剣

9. 蒸気船雛型

10. 陶器製造

11. 紙製造

12. 胡粉製造

13. 洋法搾油器械製造

14. 工匠器械製造

15. 鉛粉製造

16. 氷白糖製造

17. 地雷・水雷製造

18. 皮革・皮革機械製造

19. 膠製造

III 中村騎射場趾製薬館

27代斉興公により弘化3年(1846)創建

1. 紅色ガラスの試験

製薬局近傍の製造窯で紅色ガラス(銅赤), 透明紅ガラス(金赤)の試験に成功。(工人四本亀次郎) 安政3年より製造所を集成館に移す。

IV その他

1. 和漢洋諸種の草木・草花・果物の植付

二の丸内草木試植園にて試験栽培し, 要用品は適応の場所に移植した。

(1) 蝦夷松 北海道より取寄せ鹿児島犬迫村・諸縣郡高崎郷へ数万本を植付。

(2) 杜松樹 嘉永6年岡山より数千本取寄せ各地に植付。

(3) 年二三熟の蕎麦・二熟の稲・粟を江戸より取寄せ各地に植付。

(4) 薬草 ロシア種の大黄・アフリカ種の丁子・印度種のゴム樹・オリイフ樹・センナ樹・幾那樹・セイロン種の桂木等およそ100種を取寄せるオランダ芋(安政4年アメリカ軍艦より贈られたもの)。

(5) 耶子樹 琉球より取寄せる。

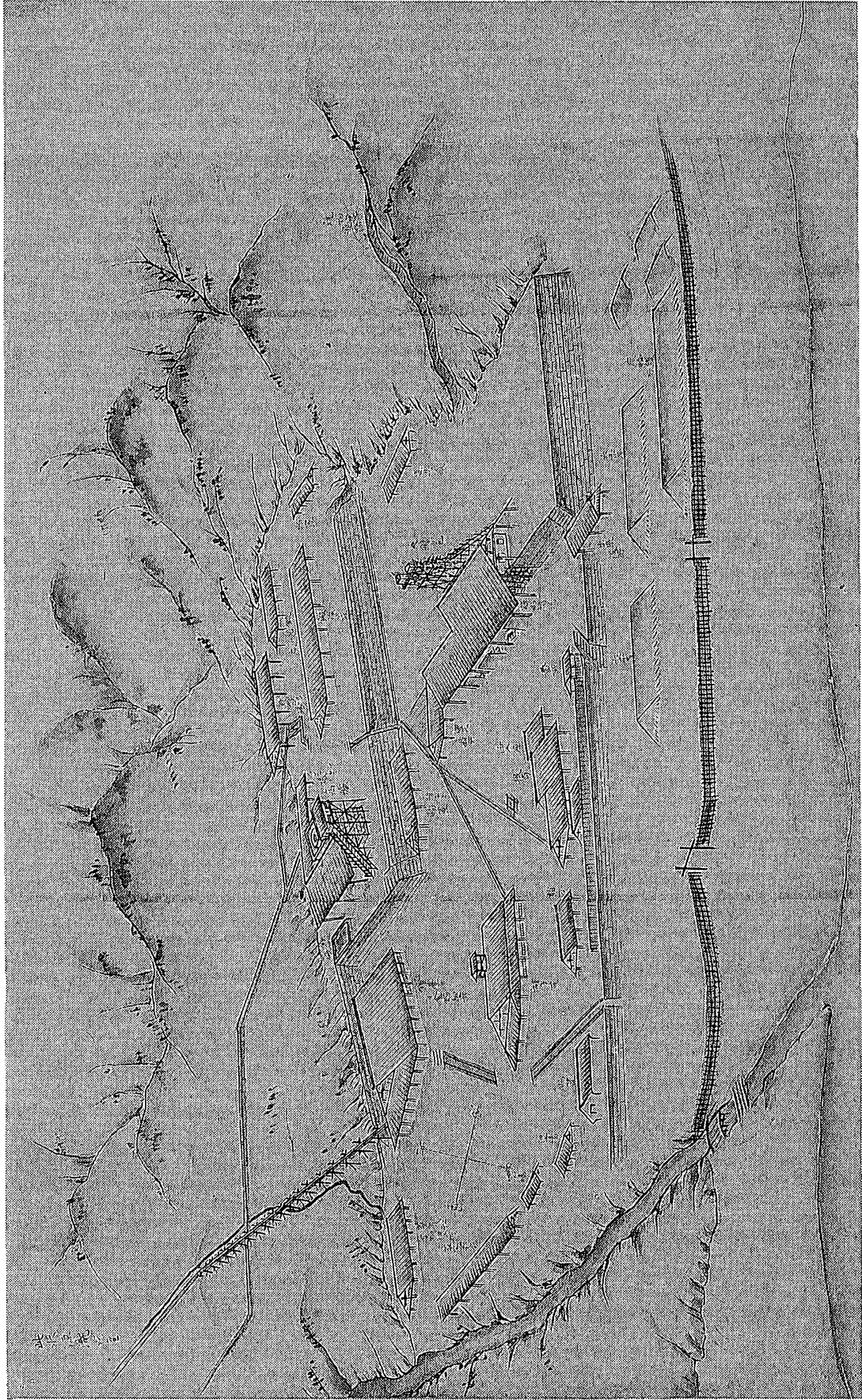
(6) 支那・台湾種の甘藷 元村海辺の畑にて栽培。

2. 昆布 箱館より取寄せ桜島にて栽培するも生育せず。

3. 白魚の卵

4. 真珠貝 各所にて試みるも生育せず。

図2 安政4（1857）年の集成館絵図



(資料) 静岡県報効会提供

5. 熊 信州より2頭を取寄せ後ち佐多山中に放つ。

6. 塩田 安政2年川本幸民に諸外国の製塩の書を翻訳させ安政4年荒田村、中村に塩田を開き、帖佐・加治木谷山にも塩田開発の計画があった。

7. 石炭坑探索 長島・獅子島・種子島・甕島・阿久根・綾において試掘するも鉱脈純良ならず、水力を研究。

8. 造船 いろは丸 安政元年 磯海浜造船所

昇平丸 “ 瀬戸村造船所

雲行丸 “ 2年 江戸

9. 杓蠟の改良・樟腦の改良

10. 紡績 中村

田上村

御穂崎

郡元村

永吉村

尚古集成館の主な展示品

立体昇平丸模型（日本最初の洋式軍艦）

雲行丸機械図（日本最初の汽船）

日時計

払郎機砲

矢立

鉛製鑄造活字（鹿児島県指定 有形文化財）

和時計

写真機（パリ製湿板写真機1839年）

茶弁当、黒塗長持、他2品

薩摩焼古窯分布図（パネル）、お庭焼（ツボ、茶碗など7点）

島津家と茶道（パネル）、茶器（茶釜、茶碗、など6点）

五大石橋（パネルと模型）

薩摩切子（8種とパネルで説明）

反射炉模型

十文字砲

薩摩藩の砲弾

英式足踏旋盤

梳綿機（鹿児島県指定文化財）

晴雨計（気圧計）

ローラー磨針機

ロンドンでの留学生(1)(2)

鹿児島紡績所の図面、遊星歯車。

雷管横打銃

削り盤

十二斤臼銃

洋式大砲

イギリス艦隊の砲弾

田村省三著『尚古集成館——島津八百年の収蔵——』春苑堂出版（1993年）によると、尚古集成館の収蔵資料は、南九州の地を七百年間にわたって統治してきた島津氏に伝えられたもので、その総数は約1万点にのぼるという。

薩摩藩の製鉄技術の評価については、大橋周治編著の『幕末明治製鉄論』アグネ社（1991年）が詳細に論じており、最近の实地調査は、1993年の東北大学名誉教授岡田広吉氏および国立科学博物館の鈴木一義氏の調査研究がある。

まず、大橋周治氏の論稿を引用しよう。

「木炭高炉製鉄法もまた、幕末日本の産業技術にとって、いちじるしく手のとどかないほど隔絶したものではなかったと言えよう。それは足踏み天秤ふいご送風の水準に達していた砂鉄製錬法「たたら吹き」が広く普及し、部分的には薩摩のように水車ふいご送風の高炉型がすでに存在し、他方築炉・耐火煉瓦、水車等の問題は反射炉・鑄砲の場合と同様の在来産業技術が基盤にあって、解決されたと考えるからである。薩摩・箱館・南部釜石および仙台領の四例のうち、箱館の古武井高炉が失敗したのは、本来高炉では製錬困難な砂鉄を原料にしたことにおもな原因があった。薩摩が鉄鉱石からの銑鉄生産に試験的には一応成功しながら工業化に至らなかったのには、水車能力の不足に問題があるともされてはいるが、優良な鉄鉱石を欠くという資源条件に制約されるところも大きかったと考えられる。また指導者島津斉彬の急逝で事業が中止されたという事情もあった。それにくらべて、南部釜石と仙台領の東磐井が高品位の磁鉄鉱に恵まれたことは絶対に必要な条件であった。」（同上書350頁）

また、薩摩—水戸—南部のネットワークに基

づく技術移転（技術流通）も生産力水準を高めるのに役立ったという。再び大橋周治論文を引用しよう。

「薩摩—水戸—南部の連繫関係は、藩意識を脱却し、時代を先取りして日本国意識をもちえた島津斉彬に負うところが大きい。新着の蘭書を互いに秘匿する一般的風潮のなかで、島津斉彬は世子の頃から水戸斉昭に蘭書とその翻訳書を贈り、反射炉の設計・築造見習のため水戸から派遣された宮大工与七を受入れ、自藩でも数少ない技術者の中から斉昭の要請に応じて竹下清右衛門を長期派遣した。南部における高炉製鉄の成功は、単に水戸鋳砲事業とのつながりだけでなく、さらに薩摩の反射炉・高炉製鉄の経験との連繫のもとで考える必要がある。さらに水戸と鳥取の関係について言えば、史料上では鳥取の和田勝蔵・武宮丹治らの製砲見習のため水戸派遣、鳥取からの鉱石見本の送付、水戸側における鳥取での高炉建設検討のほか見あたらないが、鳥取の六尾反射炉と那珂湊との立地型式の相似、六尾でも砂鉄銑の一次溶解をおもわせる八人踏み「たたら」の存在など、両家の血縁関係とともに、技術交流を推測させる材料は

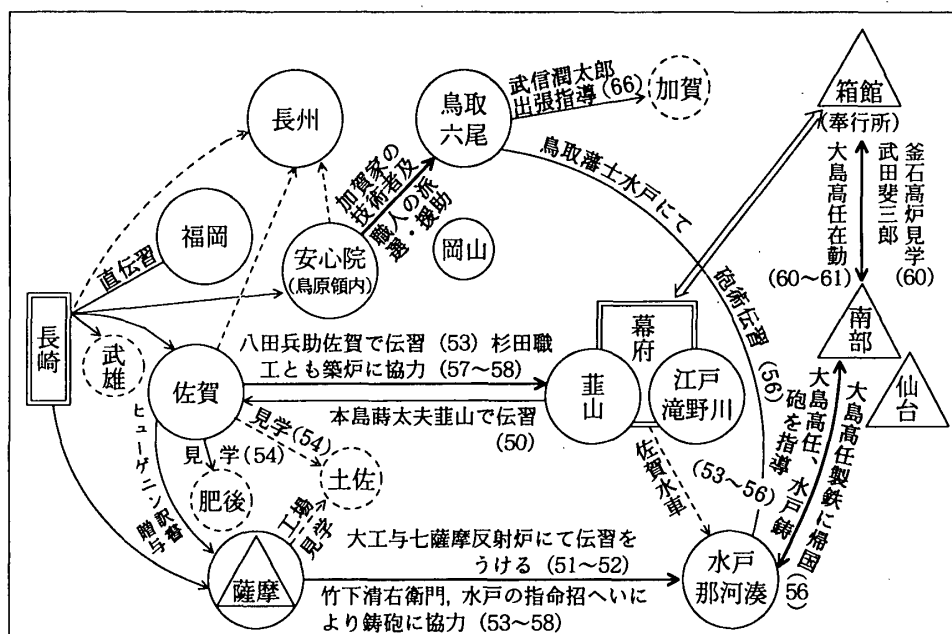
かなりある。

幕藩営工業の連繫・交流の関係は、二つのグループ間にも認められる。薩摩が佐賀からヒューゲン訳書の贈与を受けたことは広く知られている。現代から考えれば翻訳書の提供にすぎないが、翻訳自体が大事業であったこと、ペリー来航前であったことを考えると、それが薩摩の鋳砲・高炉製鉄を促進した影響は大きい。南部の大島高任は幕府の開成所教授方に任命された後、箱館に三年半在勤し、武田斐三郎は釜石高炉を見学して古武井高炉のふいご改善をはかっている。しかし右のような各種の連繫・交流の反面、藩割拠の秘密主義が幕府の陰惨な隠密警察制のもとで根強く併存し、技術交流のうで障害になっていたことも否定しがたい。」（同上書355頁）

さらに大橋周治氏は「集成館」の事業を次のように総括している。

薩摩「集成館」の場合、斉彬が「日本在来ノ銑鉄ハソノ質精良ナラズ」（言行録）という認識に立って、高炉と反射炉の築造を同時着工させているのは明らかに鋳砲材料の供給を高炉に期待したことを示すものである。しかし斉彬に

図3 幕末における製鉄技術の地域間移転



(注) ○は反射炉所在地 △は高炉所在地を示す。

○は反射炉築造に至らなかった藩。

数字は1800年代の年次である。

(資料) 大橋周治編著『幕末明治製鉄論』

よる「集成館」の計画の根底には、明らかに別の政策的意図があった。それは「物産繁殖」による貿易振興であり、そのためにも「集成館」をパイロット・プラントとする構想であった。すなわち、「集成館」の諸工業も高炉製鉄も、藩営で工業化に成功した後は、「望ミノ者へハ製式授教」して、民間資本による国産資源の開発を促すこと、製鉄業は単に兵器材料の供給にとどまらず、基礎産業として全産業の発展、貿易振興をはかるのだという意図を、この企画力豊かな君主は家臣にはっきり説明している。

「薩摩の場合は、広く軍事政治経済にわたって時代にたいする深い洞察力をもった島津斉彬が、藩営兵器工業の限界に当初から気づいて、銃砲・艦船のみでなく、軽工業もふくむ多様な産業分野の近代化を意図した『集成館』計画でそれを示した。ここで必要な点のみを要約する。

①藩営工業は西洋の技術の工業化をはかるが、製品は兵器をふくめて内外市場への販売を意図したものであった。

②工業化に成功した技術は『望ミノ者ニ授教シ』、民間資本による物産開発を促進して、内外市場に販売する。

したがって、薩摩の藩営工業への公的資金の投入は、諸藩の兵器工業とはことなり、すべて生産的な先行投資であり、停滞した封建経済を拡大再生産の新しい軌道にのせ、いわば「国民経済」の形成を当初から明確に意図したものであったのである。この産業経済政策の体系は開国とそれに対応して、より強力な中央集権国家、全国統一市場への移行という展望をもった斉彬のみが考えることのできたものである。」(同上書363頁)

「明治政府による殖産興業政策の展開を考える場合、1850～60年代の幕藩営工業のなかで人のなかに蓄積された産業技術と経営管理能力、そのなかで形成された産業経済政策の継承という二つの要素を除外することはできない。」

大橋周治氏の引用が長くなったが、薩摩の旧集成館の歴史的意義とくに、日本の産業政策史、産業技術史上の位置を確認する上で適切な評価

であると判断し引用した。世界文化遺産候補としての要件をみたしているものと判断する

〔III〕 水俣病歴史考証館および 水俣市立・水俣病資料館

現代日本経済の高度成長の構造的な裏面史として環境公害の悲慘がある。この「負の遺産」を正視し、記録に残す作業が大切であることは言うまでもない。文献資料としては、最近刊行された水俣病研究会編『水俣病事件資料集1926—1968』（全2巻、約1800頁）1996年6月刊がある。これに対し、「モノ」を主とした資料館であると同時に情報発信源でもある。

水俣病歴史考証館の方は、被害者やそれを支援する人々により設立され財団法人水俣病センター相思社（1974年設立）の中に展示空間を設けた（1988年開館）ものである。

展示品としては、チッソの製品、水俣病被害の実像、被害救済運動の資料等多様である。まさに手づくり博物館であり、各種文献も販売している。

一方、水俣市立・水俣病資料館は1993（平成5）年に開館し国土庁の助成による公設の施設である。

この資料館の案内パンフレットには次のように記されている。

「水俣病資料館は、水俣病の経緯を整理し、水俣病の歴史と現状を正しく認識し、悲慘な公害を二度と繰り返してはならないという切なる願いと、貴重な資料が散逸しないよう収集保存し、これを後世への警鐘としていくことを目的としています。

また、水俣病に関する情報の拠点となり、環境復元を祈念する市民のよりどころとして、さらには地球規模の環境問題へいささかでも貢献できることを目指しています。

今後とも、直接被害に関するものだけでなく、幅広い観点から関係する資料の収集に努めてまいりたいと思います。」

展示資料の構成は次の通り。

①水俣病の概要 ②水俣病の歴史 ③水俣病の科学 ④世界の有機水銀 ⑤水俣病への対策

⑥今後の取り組み

（展示パネル17点，模型2点，標本8点，水俣病関係映像11点，〔大型スクリーン1基，カラーモニター12台，ヘッドホンシステム，映像説明は日本語，英語の二種類〕，写真パネル27点の二種類）。

資料蔵書数は3000余点で，その内訳は次の通り。

- ・医学関係／医学研究論文，医学書
- ・行政関係／関係公文書，官公庁刊行物等
- ・政治関係／議会議事録・患者団体関係／患者団体の刊行物
- ・新聞・雑誌関係
- ・記録写真関係／写真集，ビデオテープ，映画フィルム等
- ・公害関係一般書籍
- ・法令，裁判記録。

〔Ⅳ〕 大牟田市の産業遺産

1. 石炭産業の今昔

かつての石炭の町，大牟田の現況は，石炭産業科学館の平島勇夫氏から送られた新聞記事〔熊本日々新聞，1995年1月15日付〕にみてとれる。「さて，同封しました新聞記事は，現在の三池炭鉱の状況を知るのに参考になると思いましたが，お送りします。状況は決して，産業遺産の保存・活用の方に向いているとは言えません。私個人ではどうしようもない状況です。」と，氏は記しておられる。記事は以下（一部・写真略）のとおりである：

《大牟田・荒尾発》

「石炭」とともに栄えた大牟田，荒尾から，炭鉱施設が姿を消そうとしている。“Xデー”（閉山）に備えた下準備との見方もあるが，一方では歴史的遺産としての保存機運も高まっている。炭都を包むこの慌ただしさが，忍び寄るヤマの終えんを印象づけている。

（大牟田支局・本田清悟記者）

＜忍び寄る閉山の影／施設保存の動きも＞

- ・坑口密閉 三池炭鉱発展の基礎を築いた旧勝立鉱＝大牟田市＝の坑口が，土砂で密閉されたのは昨年秋。三井石炭鉱業三池鉱業所では，

現存する旧坑口の閉鎖方針を打ち出しており，その第一弾。／勝立鉱は明治18年に掘削開始。三井財閥の近代化を推し進めた団琢磨氏が開発に心血を注いだことでも知られ，昭和4年に閉坑した。既に櫓（やぐら）などは撤去され，堅坑を残すのみとなっていた。／坑口密閉は閉山の際の“必須要件”。安全対策の面からはもちろん，政府から支給される閉山交付金の受給前提にもなるからだ。同鉱業所では「現在の採炭とは関係ない坑口なので…」と説明するが，三池も「臨戦態勢」に突入したとの見方も広まっている。

〔中略〕

- ・公園整備 一方で，郷土の歴史を後世に伝えようという動きも生まれている。昨夏にオープンした大牟田市石炭産業科学館も，その流れに沿ったものだ。／同市が計画を進めている石炭記念公園は，市所有の旧宮浦鉱跡地を整備。炭鉱節のモデルともいわれる赤レンガ積み煙突（高さ31m）を公園のシンボルとして保存する。／同鉱は明治21年に開坑。昭和52年，三川鉱との統合に伴い役目を終えた。煙突は巻き上げ機の動力源だった石炭ボイラーの排煙施設だが，建造から百年が経過して亀裂が生じるなど傷みも激しい。／本年度は煙突の補修・補強工事と併せ，大斜坑の整備や人車ホームを復元。来年度は植栽など周辺を整備する。「煙突は“近代化遺産”としての評価も高く，炭都のメモリアルパークにしたい」（市都市計画課）。／炭鉱施設の跡地を活用した企業誘致。新たな観光資源として期待も高まる石炭記念公園。石炭なき後の地域活性化のカギを，皮肉にも「炭鉱」が握っている。〔記事引用終り〕

まさに本項執筆時，残念なニュースが伝えられた。「三井三池鉱（三井石炭鉱業三池鉱業所，従業員約1200人）は1997年3月末に閉山する見通しとなった〔朝日新聞ほか1996年10月23日付〕」というものである。

三井三池炭鉱は，現在の福岡県大牟田市と荒尾市にまたがる国内最大規模の炭鉱である。官営から1889（明治22）年三井組（のちの三井財

閥)に払い下げられ、その後の炭鉱の機械化・近代化による隆盛とともに財閥三井は発展していった。戦後、石炭から石油へのエネルギー転換政策の過程で、1959～60(昭和34～35)年(人員合理化をきっかけとする、労働運動史上に残る大争議)「三池争議」、1963年「戦後最大の炭鉱災害」(炭塵爆発により、約1300人死傷)が発生した。その後、一酸化炭素(CO)中毒患者らの訴訟係争の結果成立した患者・遺族の生活救済のための労使間の「CO協定」は、96年3月に廃止された。

石炭産業と共存してきた大牟田市から、石炭産業が消えていく。石炭に代る、町おこしの起爆剤として1995年7月にオープンしたのが「大牟田市石炭産業科学館」である。

2. 大牟田市石炭産業科学館

(英文表記: Omuta Coal Industry and Science Museum)

所在地住所 〒836 福岡県大牟田市岬町6-23
TEL. 0944-53-2377
FAX. 0944-53-2340

(図4を参照)

廃坑、錆びの出た機械類、草が繁茂するボタ山などは、「かつての華やかさ」を知る者にはウラ哀しいものであろう。筆者(種田)は、華やかな昔を白黒のニュース映画でみた記憶しかない。争議に揺れ、安保に揺れたときの唯一の輝きは高校野球全国制覇であったことを、子供心に覚えている。たしかに現実の大牟田は、眠り込みそうになっている町であった。

しかしながらこの科学館は「過去を振り返るだけでなく、新しい石炭利用技術など石炭の現在、そして未来についても知識を深め、同時にエネルギー問題、環境問題についても考えてもらおう—という狙い」でオープンした。さらに、「歴史を中心にしてガラス越しに資料を見せる、という従来型の博物館からの脱却を具現化した」(日経工業新聞、1995年11月18日付)博物館でありたいと強調されている。

建物は円形の、地上1階・地下1階建てである。地下(構造上は地上階である:円錐をカッ

トした形)の入口から通路をとおり炭鉱の坑道を再現した「ダイナミックトンネル」に入ると、ドラムカッター、ロードヘッダーなどの大型機械が5つのブロックに稼働可能な状態で展示されている。これらが展示の目玉である。入口をはいってこの(E)ダイナミックトンネルに至るまでの、その他の常設展示/コーナーは半円形のフロアに2階分(B1と1F)の高さを使った吹き抜け構造の中に収まっている。

構成は(A)大地の記憶、(B)炭鉱技術のあゆみ、(C)時代と大牟田のあゆみ、(D)石炭エネルギーの利用、(F)暮らしを支える石炭、(G)エネルギーと遊ぼう(8つの楽しい仕掛けで体験学習)、(H)地球時代の石炭ストーリー(映像ホール)、(I)石炭百科(3つのコンピューターボックス)の8つ/4ゾーンである。地下1階には企画展示室・事務室・荷解室など、1階にはビデオライブラリー・図書室・研修室などがある。エントランスホールは1階と吹き抜けになっていて階段でも行き来できるようになっている。

館と隣接して、水族館・植物園(大温室)を備えた遊園地「ネイブルランド」があるほか、ビール園付工場誘致の計画もあるという。斜陽と言われて久しい石炭産業に代る集客施設として大牟田市の期待は大きいであろう。

3. 三池炭鉱・大牟田の産業遺産

平島勇夫氏からいただいた資料に、福岡県教育委員会編『福岡県の近代化遺産——日本近代化遺産総合調査報告——』(福岡県文化財調査報告書 第113集、1993年(財)西日本文化協会3000円)の抜刷(平島氏担当分“三池・大牟田・関連”<pp. 131-155>)がある。

大牟田市歴史資料館(〒836 大牟田市浄真町13)のパンフレット(1994年3月31日発行)によれば、「大牟田には石炭をキーワードに、その採炭から輸送・積み出し、さらに倶楽部や住宅、関連工場群まで一連の流れのわかる近代化遺産がトータルに、またシステムとして残っていることが大きな特徴」なのである。近代化遺産の所有者・管理者は大牟田市役所を含んで13、

表1 大牟田の近代産業遺産

| パンフレット記載遺産名 | 『福岡県の近代化遺産』 における番号 | 同左書 p. 131 地図 (図2) | 所有者・ 管理者 |
|---------------------------------------|-----------------------|-----------------------|-------------|
| * 三池炭鉱専用鉄道 | 68 | 16 | (d) |
| * 同鉄道電気機関車 | 69 | 15 | (d) |
| * 三池炭鉱三川坑 | 74 | 13 | (c) |
| * 三井港倶楽部 | 71 | 17 | (i) |
| * 三池式快速船積機 (3号機: ダンクロ・ローダー) | 70 | 18 | (d) |
| * 三池港開門 | 66 | 21 | (d) |
| * クレーン船「大金剛丸」 | 65 | 20 | (d) |
| * 旧長崎税関三池支署 (現: 三池ポートサービス(株)渠内事務所) | 64 | 14 | (b) |
| * 三川電鉄変電所 | 67 | 19 | (d) |
| * 三池炭鉱四山坑 | 73 | 12 | (c) |
| カーバイト冷却室 (現・電気化学工業(株)) | 81 | 1 | (h) |
| 大牟田商工会議所 | — | — | (l) |
| 三池炭鉱宮浦坑跡 | — | 7 | (m) |
| 泉橋 | — | — | (j) |
| * 大牟田市役所本館 | 63 | 5 | (a) |
| 三池炭鉱七浦坑 | 76 | 8 | (c) |
| 旧三池集治監外塀 (現・県立三池工業高等学校) | 78 | 22 | (f) |
| 鍛冶工場・鋳物工場 (現: (株)三井三池製作所三池事業所) | 79/80 | 2 | (g) |
| J工場 (現・三井東圧化学(株)大牟田工業所) | 82 | 3 | (e) |
| 旧労務館講堂 (現・三井東圧化学(株)大牟田工業所) | 77 | 4 | (e) |
| 江頭酒造 (資) | — | — | (k) |
| 竜湖瀬坑跡 | — | — | (c) |
| 大浦坑跡 | — | 6 | (c) |
| 大谷坑跡 | — | — | (c) |
| 山の神社 | — | — | (d) |
| 三池炭鉱勝立坑跡 | — | 9 | (c) |
| 三池炭鉱宮原坑 (稼働中) | 75 | 10 | (c) |
| 三池炭鉱万田坑跡 (閉坑したが稼働化) | 72 | 11 | (c) |

〔参考: 鉅手 (カネンテ) 水門 83/—=当該番号なし〕

*: 今回の調査で坂井義哉氏 (大牟田市役所) にガイド・ヒアリングいただいた所

所有者・管理者: (a)大牟田市役所 (行政管理部総務課) (b)三池ポートサービス(株)
(c)三井石炭鉱業(株)三池鉱業所 (d)三井鉱山(株)三池事業所
(e)三井東圧化学(株)大牟田工業所 (f)福岡県立三池工業高等学校
(g)三井三池製作所三池事業所 (h)電気化学工業(株)大牟田工場
(i)三井港倶楽部 (j)大牟田市役所 (建設部土木課)
(k)江頭酒造 (資) (l)大牟田商工会議所
(m)大牟田市役所 (都市整備部都市計画課)

〔資料〕『福岡県の近代化遺産』より作成。

内容や見学の問い合わせは2ヶ所——歴史資料館と市教育委員会生涯学習課文化担当（大牟田市有明町2-3）——となっており、28遺産がリストアップされている（表1参照）。

4. 大牟田市立三池カルタ記念館

（英文表記：Miike Playing Card Memorial Museum in Omuta）

カルタックスおおむた

（市立図書館との複合施設）

所在地、〒836 福岡県大牟田市宝坂町2-2-3

TEL 0944-53-8780

FAX 0944-43-1167

開館 9時～17時

休館日 月・祝日の翌日、年末年始（12.29—1.3）、毎月最終木曜

観覧料 児童・生徒100円（団体20人以上70円）、一般300円（200円）

館内の⑤カルタの作り方・コーナーをみたとき、任天堂寄贈の版木や作業道具から不思議な思いをした。というのも、京都の花札やトランプカードを作っていたお店「任天堂」が、ファミコンによってゲームの世界を席卷するとは、正直いって20～30年前には誰も予想できなかったことだからである。

館のパンフレットによれば、「日本におけるカルタの歴史は、ポルトガル人の影響を受けて、16世紀の末ごろ、筑後の三池で作り始められたといわれて」いる。その頃（天正年間）のものだと推定されるカルタがたった1枚、兵庫県芦屋市の滴翠（てきすい）美術館に保存されている。この天正カルタは記された銘から、当時の「三池住貞次（みいけじゅうさだつぐ）」の作といわれている。「文献によれば、三池の住人たちによって作られたカルタは、絵柄の美しさや遊びの面白さなどから、全国に広がって…京都では、特にできのいいカルタのことを「三池」と呼んでい」たのである。

館（2Fの一部）は市立図書館（2F・3F＜事務／書庫／サービス部門＞）との複合施設で、1階は入口と駐車・駐輪場になっていて、あわせて『カルタックスおおむた』と称してい

る。カルタ館の入口を入った直ぐ横が①カルタの起こり・コーナーで、日本最古の天正カルタ（前述：レプリカ展示）の説明とカルタ発祥の地の宣言（大牟田市）が掲げられてある。その次は「船倉のジオラマ」、ポルトガル人水夫たち4人が船底の一室でカルタ遊び（おそらく「賭け事」）をしている様子らしいが、私はブルーゲルの絵（複製）の方がよかったように思った。

②カルタの来た道、③三池カルタの誕生、④花開く江戸時代のカルタ文化、⑤カルタの作り方（前述）、⑥子供用カルタの世界、⑦カルタの森、⑧映像ルーム（15～20人が座れるコーナー）、⑨プレイングルーム（8～10人が遊べるように事務所にトランプ、カルタが用意されている）という構成である。わずか819平方メートルに、200点の常設展示（復元天正カルタ＜1991年作成＞、貝源氏絵入りかるた、小倉百人一首など）と企画展示（⑦）を行っておられる。そこには見事な空間演出があり、楽しい世界が広がっていた。

〔付〕 大宰府市の文化遺産

学問の神様として有名な菅原道真がまつられていること、梅の名所であることを知らない人はいないのが、太宰府天満宮である。福岡市の中心、天神から地下鉄・西鉄で約40分ということも観光・集客には便利なところであろう。

約10年ほど前から、この地に「国立九州博物館」（仮）を誘致しようという運動があり、私たちの調査も当初は関係者からヒアリングをしようという目的があった。近年国内の博物館・美術館建設ブーム（ラッシュ）にあって、産業技術史・考古学・建築に関する国立（中央）博物館がないのは先進国の中では日本だけであろう。私たち（庄谷、並川、種田）も「産業技術史博物館」（仮）の建設推進に向けて多少なりとも関わってきたので、太宰府の動向は気になる場所であった。残念ながら年度末の週末のため、ヒアリングはできなかった。鳥居脇に小さな看板を見つけたに過ぎなかった。他日を期したい。

太宰府天満宮では、「鬼すべ」（福岡県無形

民俗文化財：1月7日),「うそ替え」(神事：1月7日),「節分厄除大祭」(鬼遣神事・厄除瓢箪祭：2月1日～7日),「曲水の宴」(禊祓神事：3月第1日曜日),「千燈明」(大江匡房が康和3年(1101)に始めた道真公の御神霊慰め神事：7月25日・9月25日),「神幸式大祭」(福岡県無形民俗文化財：9月21～25日)が主な大きな年中行事である。したがって受験シーズンのみならず、お参りに観光に訪れる人は多い。調査時はちょうど「曲水の宴」の前日で、境内では準備が始まっていた。

太宰府天満宮宝物殿

[英文表記：Temmangu Museum]

〒818-01 福岡県太宰府市宰府4-7-1

(社務所 TEL. 092-922-8225

FAX. 092-921-1010)

開館時間：8時30分～17時(入館は16時30分まで)

休館日：無休

入館料：一般200円，大高生150円，中小生100円／30人以上団体割引あり

国の重要文化財の本殿(天正19(1591)年，小早川隆景公が寄進した流破風造建築)の横に入ると直ぐの所にある。開館は昭和3(1928)年3月であるが，平成4(1992)年に道真公薨去・祠鎮1090年と本殿再建400年を記念してリニューアルされた。

主な収蔵品は，国宝「翰苑」のほか，重要文化財の「蓮華唐花文塼」・「天満宮安楽寺草創日記」・「毛抜形刀」・伝菅公神筆「五言絶句双幅」・「紺紙金字法華経」・「天満宮境内絵図」・「北野天神縁起絵巻」・「鶴亀文懸鏡」などの古文書・書画・文書類である<第二展示室>。これらを通して天神信仰の一端を知ることができよう。

さらに御祭神道真公の遺品，文台・硯箱などの漆芸品，甲冑・太刀などの武具，神仏分離(明治政府の宗教政策)前の調度品，幕末太宰府に滞在した五卿の遺品，太宰府政庁跡・安楽寺・宝山寺等出土の考古資料などがある<第一展示室>。天満宮は，建物や庭・梅，近隣の遺跡・政庁遺構を含む全体が歴史的な遺産なので

ある。

[V] 中富記念 くすり博物館

中富記念くすり博物館は久光製薬株式会社の創立145周年記念事業の一つとしてつくられた。

1. 「サロンパス」で知られる久光製薬の沿革
創業者久光仁平〔文政元(1818)年生〕は田代代官所の侍医荒木安易より漢方薬の製法を習っていたが，弘化4(1847)年に佐賀県基肄郡田代村大字田代駅(現鳥栖市田代大宮町)で製薬・売薬の店小松屋を創業し，婦人病の薬「安妙湯」，「健胃功勝丹」，「小児丸」を製造発売した。嘉永2(1849)年に日向領での配置売薬をはじめた。明治2(1869)年には田代売薬の行商圈は九州・四国・中国地方にまで広がっており，小松屋も「奇神丹」「明治膏」の配置売薬をはじめた。明治4(1871)年に仁平は長男久光與市(26才)に家督を譲り，小松屋は久光常英堂となる。明治10年に久光仁平は没した。享年60才。

明治27(1894)年8月の日清戦争の勃発後，兵士に健胃消毒剤「奇神丹」を売り込み，明治28年には薬効を聞いた兵站部から多量の発注を受け，その後軍用薬に指定された。相当の売り上げを計上し，資金余力を得た。明治27年，「奇神丹」の各地薬店への卸売りが開始され，その後も伸長を続けた。

明治35(1902)年，與市の長男久光千太郎は高千穂方面の得意を得て分家し，明治36(1903)年12月，與市の他の息子4人によって，佐賀県三養基郡田代村大字田代又203番地を本社として久光兄弟合名会社が設立され，個人経営から法人経営に代わった。與市の推挙によって三男の久光三郎が代表者に就任した。ひび・あかぎれの鉛丹硬膏「朝日万金膏」の製造を開始，困難に遭遇し，明治40年になって発売，また同年健胃下剤「快腹丸」を発売した。明治41(1908)年には，「アスピリン丸」の製造をはじめ，感冒薬「赤龍丸」を発売，明治42年には，回虫下し「セメンエン散」，健胃下剤「快腹丸」の改良品を，また，明治44年には健胃強壯剤「胃腸丸」と解熱剤「アンチヘブリン散」を発売した。

明治38年10月久光三郎は旧久留米藩士の士族・中富家に迎えられ、中富三郎となる。

明治末から大正にかけて、朝鮮、中国東北地方、台湾の各地に薬店舗による販売網を確立、医薬品を輸出した。

大正2(1913)年に久光與市は72才の生涯を閉じた。

大正6(1917)年に、久光兄弟合名会社社屋(本館と西工場の二階建二棟)が完成。工場設備が人力から機械力へ転換され、大正8(1919)年には粉碎機、煉合機、製丸機、乾燥機に電動機が取り付けられ、相次いで工場の電化が進んだ。

大正13(1924)年に「中富胃散」「鎮経水」「体内百毒下し」「伯仲膏」「筑紫五臓円」「特選淋消薬」を発売。また、昭和2(1927)年には「対熱散」を、昭和4年には「大衆目薬」「歯痛液」を、そして、昭和5年に「一等せき」、頭痛薬「將軍梅」を発売した。

昭和7(1932)年に、配置販売と卸売販売の努力が重ねられる中で、雑貨屋や荒物屋などに主力商品「朝日万金膏」の現品を持ち込み販売を委託する持行販売制度を実施し、「朝日万金膏」の需要は伸び続け、昭和9年には売上高の3分の2を占めるにいたった。しかし、外務員が持ち帰った白色貼付剤は膏体が肌に残らずきれいにはがれ、独特の臭いがあり黒色の膏体が皮膚に残ったりする「朝日万金膏」の難点を越えるものがあつた。建設部会が設けられ検討が進められたが、製造技術の確立まで相当の時間が必要と予想されたので、白色貼付剤製造元の天来本舗から製造技術者が直接スカウトされた。

昭和9年に試作品第一号ができ、主成分サリチル酸メチルのプラスター(硬膏)をヒントに新商品名として「サロンパス」「SALONPAS」と決められた。

「サロンパス」のテスト販売は鹿児島からスタートし、サンプルを各住宅に配布して試用した人が薬店舗に追加品を求めるように仕向けた。昭和10年にはテスト販売は西日本へと広がった。昭和11年9月、「サロンパス・SALONPAS」が商標登録され、11月から本格的な販売が

開始された。昭和12年には「サロンパス」を海外へ輸出しはじめた。

昭和26(1951)年に久光兄弟合名会社、三養基製薬株式会社(中富二六社長)、田代鋤機株式会社の三社を統一し、久光兄弟株式会社(中富正義社長)を発足させた。昭和32年3月17日に中富三郎は生涯を閉じた。享年82才。

創業115周年に当たる昭和37年9月に株式を公開、これを機会に昭和40年4月社名を久光製薬株式会社と改称し、医療用医薬品分野にも進出を開始した。

昭和38年に消炎鎮痛剤「エアーサロンパス」を発売。「サロンパス」を中軸とし、これに続く商品として43年に「サロンパスE」、44年に「サロンパスリニメント」を開発、「サロンパスワイド」を発売、46年に「サロンシップ」、47年に「サロンパス中判」、50年に「サロンカップ」、52年に「ニューサロンパス」、「ハイゲルサロンパス」、54年に「ジャストサロンパス」を発売した。

昭和56(1981)年5月、中富正義は会長に就任し、中富博隆が社長になった。

昭和63(1988)年、財団法人中富健康科学振興財団を設立し、医療分野での研究助成をはじめた。

平成4(1992)年、久光製薬株式会社は創業145周年を迎えた。平成2(1990)年に財団法人中富記念財団を設立し、「中富記念くすり博物館」の建設への取り組みがはじまった。長い歴史の中で蓄えられた医薬品に関わる様々な資料、器具機材を公開展示するだけでなく、九州一円並びに広く全国から医薬品に関わる資料を収集し、医薬品と人との関わりの歴史を広く展示しようという目標をもって作業が進められた。

〔『百四十五年史』参照〕

2. 中富記念くすり博物館

鳥栖地域には江戸中期に起源をもつ田代売薬が発展し、この古い伝統をもつ製薬業は現在でも佐賀県東部地区の産業の一翼を担っている。博物館では医薬品全般に渡る資料を展示するとともに、この「田代売薬」に関する文献や資料

が多く展示されている。

博物館は鳥栖市神辺町288-1に敷地 6,283m²、延床面積 1,407 m² の鉄骨鉄筋コンクリート 2 階建としてつくられ、平成 7 (1995) 年 3 月 28 日に開館した。イタリアの彫刻家チェッコ・ボナノッテ (Cecco Bonanotte) 氏による設計で、コンセプトとして「外壁は、1メートル平方の天然石25枚を単位とした5メートル立方のキューブが基本の形で、その組み合わせで構成する。それは、人間の生命の源(細胞)を意味し、リピートさせることにより生命の力強さを表現させている。また、自然との調和を考えた石とガラスによるシンプルで力強い構成は、人類の永遠の象徴としていつの時代にも個性的で価値を失わない建物とすることを主眼とした」と紹介されている。

内部へ入ると、1階エントランスホール右手に受付とショップがあり、先へ進むと次のような「設立趣旨」が掲げられている。「佐賀県鳥栖市田代から基山町にわたる一帯は、慶長四年(一五九九)に対馬藩田代領となり江戸時代中期に「田代売薬」が起こったところです。それ以後の「田代売薬」の発展は、この地区に社会面及び経済面で大きな蓄積を残し、今日では製薬業は佐賀県の産業の一翼を担うまでに成長しました。しかし、近代化の流れの中で、くすりの製造・販売に関わってきた伝統的な道具、文書類などはそのほとんどが散逸し、歴史のかなたに消え去ろうとしています。これを惜しみ、先達の活躍に思いをいたすとともに「くすり」の文化遺産を通してくすりに関する産業文化を後世の人々に伝え、これからのくすりと健康について考える生涯学習の場として役立つことを願い久光製薬㈱の創業百四十五周年の記念事業として当博物館を設立しました。館内所蔵の資料は多くの方々の御提供によるものです。」と印されている。

1階展示室は7つのコーナーからなり、現在のくすりに関する情報とともにアトキン薬局を移設再現している。まず、(1)「病気とくすり」のコーナーでは、くすりの使用目的を①感染症を予防する②からだに不足なものを補う③病気

の症状を抑える④病気のもとを取り除くの4つに分けて説明している。また、散薬混和機(s35年製)ボールミルが展示されている。(2)「新しいくすりができるまで」コーナーでは、くすりの研究、臨床試験、審査までの過程をパネルを使って説明している。プラントとして合成工程の中の汎用装置(溶媒回収装置、精密蒸留装置、分留装置)が置かれている。(3)「くすりのかたち」コーナーでは、一般用医薬品、医療用医薬品を18のアイテムに分類し、見本を展示している。(4)「アルバン アトキン薬局」コーナーでは、19世紀末にイギリス・ロンドン郊外のハムステッドにあった薬局(Alban Atkin Chemists)をそのまま移設再現している。文書類、くすりビン、DISPENSING DEPARTMENT がある。(5)「くすりの歴史」のコーナーでは、世界のくすりに関する年表とメソポタミアの粘土板(くすりのつくり方が書かれた文明史上最古の記録で楔形文字BC 3000年頃)、そして「医薬の進歩に貢献した人々」としてヒポクラテス、ガレノス、ヴェサリウス、ジェンナー、ゼルテュルナー、パストゥール、コッホ、北里柴三郎や鈴木梅太郎、フレミングなどが紹介され、シュメールタブレットの処方、北里柴三郎が改良考案した嫌気性菌培養装置が展示されている。(6)「映像室」は14席あり、DDS(ドラッグデリバリーシステム)を上映。(7)「特別展示」コーナーには、攪拌擂潰機、打錠機(s51年製)、浸煎剤機(s37年製)、各国製の顕微鏡、天秤各種、乳鉢・乳棒、くすりビン、往診用薬箱などが展示されている。

2階展示室は8つのコーナーからなり、「田代売薬」を中心に日本のくすりの歴史に関する資料を展示している。階段を上がると正面に「日本のくすりと文化」という表題で年表が掲げられている。(1)左手の「くすりの神様」のコーナーでは、掛け軸と木製像で古代中国の伝説上の薬祖神“神農像”などを展示している。(2)「現存する日本最古の生薬」のコーナーでは、正倉院北倉に収められた薬物60品目について標本とパネルで紹介している。(3)「生薬」のコーナーでは、動物、植物、鉱物の生薬の標本を展

示している。(4)「文献」のコーナーでは、「本草綱目(1653)」「傷寒論辨正(1790)」など古書籍が紹介されている。(5)「田代のくすり」のコーナーは①「くすりのできるまで(丸薬の場合)」②「くすりの行商(田代売薬)」に別れており、前者では丸薬ができるまでの乾かす、刻む(片手切り、両手切り、薬研)、搗る(挽臼、乳鉢)、篩う(丸篩、箱篩)、合わせる(竿秤)、捏ねる(捏鉢)、丸める(押し出し式製丸機バラ)、箔付け(ナツメ)、包む(計量匙、口折、薬袋用の版木)といった工程に沿って使われる用具を展示している。後者では、行商の様子をパネルで説明するとともに、江戸時代の薬袋やくすりを入れて持ち歩く行李、それを包む風呂敷、厚司、傘、矢立、煙管、売り渡し証文手形、配置帳、往来手形、行商札など田代配置売薬に関する資料、関連写真などを置いている。(5)―①のコーナーの通路を挟んで反対側に(6)「薬舗」のコーナーがあり、江戸末期から明治初期にかけての薬舗の様子を想像し復元している。薬簞笥、帳場、大福帳、薬研、医者の道具、置き看板、掛け看枚などがある。(7)「田代売薬シスター」では、田代売薬の発祥から明治、大正、昭和までをビデオにより紹介している。(8)「医者の道具とくすり、富山の売薬さん」コーナーでは、らんびき、振り売り箱、売薬版画のいろいろなどが置かれている。この他、2階にはレ

ストスペース、企画展示室、教室などに使える多目的ホールがある。

収蔵品は約2万点、その内約3千点が現在展示されている。

建物を取り巻く庭園には様々な薬木や薬草が植えられている。

所在地 鳥栖市神辺町288-1

(電話0942-84-3334)

交通 車 九州自動車道利用の場合 鳥栖インターから34号線方向に降りて佐賀方面に向い田代公園入口から田代公園方向に入り約2分

5号バイパス利用の場合 柚比インターで降りて2分

電車 JR田代駅よりタクシーで5分

JR鳥栖駅よりタクシーで7分

西鉄小郡駅よりタクシーで13分

開館時間 10時から17時まで(入館は16時30分まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

入館料 大人300円(200円)、大・高生200円(100円)、中・小生100円(50円)
括弧内20名以上の団体

(執筆分担は〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕、〔Ⅲ〕庄谷、〔Ⅳ〕種田、〔Ⅴ〕並川である。)